

令和4年度 信州 ESD/SDGs 成果発表&交流会 実践記録

1. 学校名 信州大学教育学部附属松本小学校 対象（4学年、児童36名）

2. 探求課題・活動実践の概要、ねらい、目標等

(1)活動名 レジリエンストイレ体験、起震車体験、避難所宿泊体験、全部自分たちでやってみよう！！

(2)目 標

・レジリエンストイレ体験、起震車体験、避難所宿泊体験それぞれについて、自らの問いを設定し、その解決に必要な方法をはっきりさせながら計画、実行する。

・自分と異なった問いや追究方法をもつ友達の意見を生かしながら、協働的に探究活動に取り組む。

(3)ESD の視点、育成する資質・能力

①構成概念

多様性（多種多様な現象が起きていること）

公平性（一人ひとりを大切に）

相互性（関わりあっている）

連携性（互いに連携・協力すること）

有限性（限りがある）

責任制（責任を持って）

その他（ ）

②育成する資質・能力

批判的に考える力

他者と協力する力

未来像を予測して計画を立てる力

つながりを尊重する態度

多面的・総合的に考える力

進んで参加する態度

コミュニケーションを行う力

(4)関連する SDG s

9 産業と技術革新の基盤をつくろう

11 住み続けられるまちづくりを

(5)探求課題・活動実践の概要

「避難所で困ることの上位はトイレである」という事実と出会い、避難の際の水栓を体験したり、高い確率で松本起ると言われている大地震を起震車で感じたり、その際、避難所になっている学校に実際に宿泊したりする活動を行ってきた。その際、ただ調べた知識ではなく、問いをもって調べたことを実証してみることにより、実感の伴った学びになっていった。

3. 流れ（指導計画の概略）と効果・反応・所感

・1学期：zoomによるオンライン授業の中で自分たちの家の周りの危険個所をGoogleマップを用いて探した。また、登校してきてからは、学校の周りの危険個所をタブレット等を使ってまとめるとともに、大学の先生や、地区の公民館長さんにその地区の危険箇所や避難所の説明を受けた。自らの家の周りや学校の周りを実際に歩いてみることで危険個所を身近に感じることができた。

・2学期：熊本地震でもっとも困ったこととして挙げられていた「トイレ問題」。そのことを調べていく中で、自分たちの小学校のトイレが災害に対応しているトイレであることを知る。それに応じてトイレを作った企業の方をお呼びし、その使用方法や効果についてのお話をしてもらった。プールからバケツで水を5リットルくみ取り、それを持って通常のトイレに流すことによって、その大変さを体感することができた。

長野県にとって身近な災害である地震、さらに松本市に通っている断層にも関連して、実際の地震に近い形で体験することができる起震車を呼び、クラス全員で体験をした。地震の揺れを体験するとともに、実際にはその揺れが予想できないタイミングでやってくることを理解することで、災害への備えをしようという心情を養った。

2学期末には、災害への備えについての学習から、自ら据えた問いを解決するために、指定避難所になっている小学校で宿泊体験をし、自らが計画した防災食を調理して食べたり、自らが作った段ボールシェルターで寝たりして、検証した。また、松本市の危機管理課の防災専門官の方にもお越しいただき、お話をいただくとともに、段ボールベッド組み立て体験や、クロスロードゲームも行った。自らの体で体験してみることにより、段ボールシェルターの不十分さや防災食の準備の大変さ等に気づくことができた。大人数で寝ることで、実際の避難所でのストレスもより感じるすることができた。

・3学期：宿泊体験を経て、自らの問いの検証からさらに発展させるために手作りの防災グッズを作る活動を行うとともに、年間の活動のまとめを行った。

5. 指導方法・体制の工夫（協力者や資源）

- ・地区の町会長のNさん
- ・信州大学の横山先生